

浜の地元学 —担い手育成への取り組み—

宿戸漁業研究会
吹切 守

1. 地域の概要

私たちが住んでいる洋野町は海に面した種市町と山に囲まれた大野村が平成 18 年 1 月 1 日に合併してできた、岩手県沿岸部最北の町で、種市地区は「南部もぐりとウニの里」、大野地区は「1人1芸の里」として知られている。(図1)

2. 漁業の概要

種市南漁業協同組合は組合員数 306 名、昨年の販売事業取扱高 2,023 トン、8 億 6,000 万円余りとなっている。海岸には干潮時に沖合に向かって百数十メートルも露出する全国的にも珍しい平岩盤がある。(写真1) 私たちの宿戸地区では、この平岩盤を有効に活用してウニ・アワビの漁獲量を増やすため、この岩盤に溝を掘るとともに、県下に先駆けて潜水漁法を導入し、共同作業によるウニの移殖や漁場管理を行うなど、採介藻漁業を中心とした漁業を営んでいる。

3. 研究グループの組織と運営

宿戸漁業研究会は、昭和 52 年に当時の宿戸漁協の下部組織として結成された。宿戸漁協は平成 15 年に近隣の 4 漁協と合併して種市南漁協となったが、当研究会はそれまでと同様に活動している。研究会には、宿戸地区の素潜り漁をする男性漁師 50 名のうち、ほぼ半数の 26 名が所属している。現在はウニの直売、稚ナマコ増養殖試験、小中学校の体験学習支援などに取り組んでいる。

4. 実践活動課題選定の動機

私たちの宿戸地区でも高齢化が進んでおり、後継者不足が起きている。この原因の一つとして、子供たちが浜に接する機会が少なくなり、水産業に関する理解が不足していることだと考えている。私たちが子供のころ、子供は浜への出入りが自由で、遊びの中でいろんなことを学んだ。しかし、今はお金をかけて放流したアワビやウニを守るための密漁対策や学校にプールが整備されたことなどにより、浜で遊ぶ機会がなくなった。後継者不足を何とかしたいと思い、小中学校の体験教室や種市高校の潜水実習などの支援を行っている。この活動を通して、地元の資源（磯根資源）や文化（潜水技術）を見つめ直し、それを大切に守り育てている水産業を今の子供たちに学んでもらおうと考え、取り組み始めた。

5. 実践活動状況及び成果

① 平成7年から宿戸小学校の水産教室を実施

ウニの生産量が岩手県内で1番多いのが洋野町であることから、ウニ・アワビを題材とした体験を実施した。(表1)

アワビ養殖場の見学では、ブロックに小さなアワビが沢山ついていることに驚いたり、殻が緑色をしていることを不思議がっていた。

生物観察では、ぬれることも気にせず、元気いっぱいにかニやつブを採っていた。また、自分で採ったウニからウニ割器、ピンセット、スプーンを使って不器用ながらも「わた」を取り除いて、満面の笑みを浮かべながら食べていた。(写真2)

最後に子供たちから「楽しかった」という感想が得られ、海の近くで過ごしていても普段は経験できない岩盤での生物観察やウニ採りなど、自然とのふれあいの中で、浜の仕事に興味を持ってもらえたと思う。

② 平成17年から宿戸中学校の体験教室を実施

宿戸中学校が推進する「キャリア教育」に協力して「ウニ漁と塩ウニ作り体験、そして漁師のウニ漁の手伝い」を実施した。(表2)

この体験はウニの最盛期である7月に、私たちのほか、女性部と漁協職員、県の普及指導員が指導して、生徒が自分たちでウニを採り、塩ウニにしてビンに詰めるというもので、3日間にわたって行っている。

1日目はウニ採りで、水は非常に冷たい中、そんなことはもろともせず元気にウニを採っている。(写真3) もちろん小さいウニは採らないなど、資源管理をきちっと守っている。この時には地元の種市高校海洋開発科の協力により、先生と生徒(宿戸中出身者が中心となっている)が海に入って安全確保に努めている。この体験と組合員のウニ漁の日が重なると、生徒たちには組合員が採ってきたウニの陸揚げ作業やむき身作業も手伝ってもらおう。

2日目はむき身と塩漬け作業で、白衣に身を包み衛生管理に気を配りながら、真剣に取り組んでいる。(写真4) てきぱきと意外に上手に作業をこなしている。

最後の3日目はビン詰め作業で、間に空気が入らないよう注意しながら、真剣なまなざしでビンに詰める。ビン詰めしたうち1本は生徒が持ち帰り、残ったものは文化祭で販売するため、冷凍保管している。文化祭での販売は好評で、この利益は翌年の漁業体験費用の一部にあてている。

生徒からは「ウニ採りの手伝いをしたい」「地域の人との会話が楽しかった」「地元の仕事について深く知ることができたし、将来のことを考える参考になった」などの感想が寄せられており、宿戸の浜に興味や関心を持ってもらえたと思う。

③ 平成13年から種市高校海洋開発科の潜水実習を支援

洋野町の種市高校には、潜水を育成する全国でも数少ない海洋開発科がある。私たちの地区ではウニ・アワビを素潜りで漁獲したり、身入りの悪い深場のウニをスキューバ潜水で採捕し、浅場で海藻の生えやすい増殖場に移す「移殖作業」を実施することから、潜水技術の習得は洋野の漁師にとって必要不可欠なものである。

このことから種市高校と連携し、平成13年から生徒たちの潜水技術向上と地域貢献を目的としてスキューバ潜水によるウニの移植作業実習を実施している。(表3)

海での作業は海流があり姿勢を保つのが難しく、プールの練習では経験できない技術である。ウニの移植作業ではウニを傷つけないよう、さらに素早く効率よく作業することが基本であり、この点を体得できるよう指導した。実習の後半になると最初のころに比べて姿勢が安定し、作業もスムーズに行えるようになるなど、実習の効果がみられた。(写真5)

④ 小中高一貫での学習支援

平成7年に小学校で始めてから、ようやく目指していた小中高一貫の「浜の地元学」の体制が整った。今年中学校の体験を手伝ってもらった海洋開発科の生徒の中に、中学校での体験学習の第1期生もいて、一生懸命手伝っている姿がとても頼もしく感じられた。また、種市高校の潜水実習の際、生徒から「小学校の水産教室での経験も水産に興味を持った一因である」という話を聞いたことがある。これらのことは長年の活動が一つの形として現れたものと嬉しく思うとともに、継続することの意義を再確認した。

子供たちの中には一度よその企業へ就職するが、何年か後には地元へ戻って漁業を継ぐ子もいることから、このような交流を通して、漁業の楽しさや難しさ、漁業に対する興味や理解を持ってもらい、ひとりでも多くの担い手が増えてくれることを期待したい。

6. 波及効果

子供のころから浜の生物や地元の漁業を体験することで、①地域の漁業への興味や理解が高まり、②学校との連携強化につながり、そして種市高校の潜水実習支援では③地元の浜を学習フィールドとすることで実践的な潜水技術が向上するなど、漁業後継者につながることを期待している。

私たちの研究会へ今年新たに、20代と30代前半の計3名が加わったが、この内の1名は平成13年に種市高校の生徒として、ウニ移植(潜水実習)に参加し、その後民間会社を経験して地元に戻ってきた。彼は「ウニ移植の潜水実習で地元の浜を身近に感じたことや、漁師の方が生き生きと働いている姿を見て、いずれは自分も地元で漁業をしたい」と感じていたらしい。われわれの体験学習の取り組みが実を結んだものと、うれしく思っている。また、漁業体験を始めてから、生徒たちが浜に泳ぎに来ることが多くなったように感じている。

7. 今後の課題や計画と問題点

今年研究会に加わった青年は初期の水産教室を経験した人なので、これからもこれに続く人が出てくるよう、小学校から高校までの一貫した学習支援を行って、地元の水産業に興味や関心もってもらいたいと考えている。さらにすばらしい水産資源に恵まれた私たちの地域を自慢できる子供たちを育てて、どこに住んでいてもこの地域とウニ・アワビ等の水産物をPRしてもらいたいと考えている。

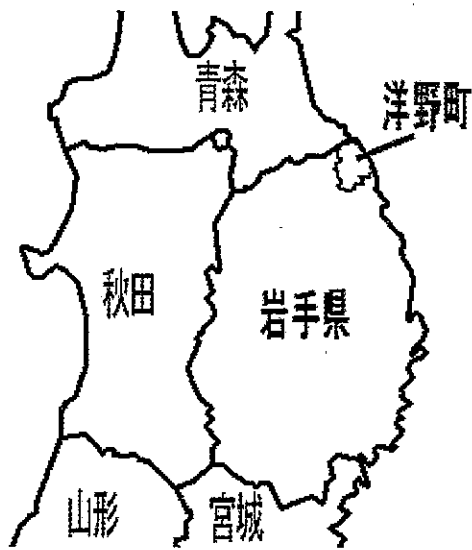


図1 岩手県九戸郡洋野町



写真1 平岩盤（増殖場）



写真2 小学校ウニむき作業



写真3 中学校ウニ採り



写真4 むき身作業

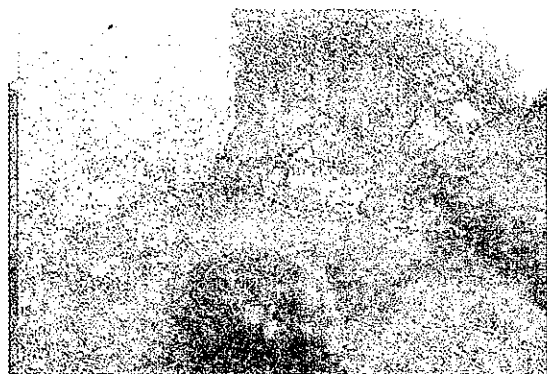


写真5 潜水実習（ウニ移殖）

表1 宿戸小学校の水産教室

ねらい	浜に親しむ
体験内容	① ウニ・アワビをつくり育てる漁業について学習
	② ウニの体の構造について学習
	③ アワビ養殖場の見学
	④ 干出岩盤での生物観察とウニ採り体験
	⑤ ウニむき身作業体験

表2 宿戸中学校の体験教室

ねらい	① 浜の仕事を通して働くことの楽しさ、厳しさを学ぶ
	② 宿戸の海や漁業活動のすばらしさを理解し、地元を大切にする心を身につける
体験内容	① ウニ採り作業
	② 漁師のウニ漁の手伝い
	③ ウニむき身・塩漬け作業
	④ ビン詰め作業

表3 種市高校の潜水実習支援

ねらい	① 海での潜水技術の向上
	② 地域への貢献
体験内容	① ウニ移殖作業の意義
	② スキューバ潜水によるウニ採捕
	③ 海での実践に即した潜水技術